特集

新春

世界に活躍 江戸独楽職人

知る

熟練の手先が生み出す回転の妙

上今泉在住 広井政昭（ひろいまさあき）さん（68）

市内上今泉在住の広井政昭さん（＝写真）は賢二郎氏の次男で、朝顕氏の師匠から数えて4代目に当たります。仙台在住の兄・道顕さんとともに、江戸の挽き物玩具作りの伝統を伝える数少ない職人です。

中でも、独楽の回る力を利用した「からくり独楽」の分野では、ユーモアとアイデアにあふれた独自の作風を誇っています。

その活動舞台は国内にとどまらず、世界各地にまで及んでいます。日本文化紹介の功績で、米国ワシントン州シアトル市の名誉市民第1号となったほか、フランス・パリ市のルーフル美術館にも作品が展示されているほどです。

来年を迎える今回は、世界的に著名な広井さんの「江戸独楽ワールド」をご紹介します。

江戸独楽は、元禄のころ大流行した曲独楽にヒントを得て、単にひもを巻いて回すだけでなく、からくりを応用しておもしろい回転をさせたり、見て楽しめるいろいろな意匠を凝らしたりして作りあげた、木製の独楽です。

この独楽は、明治天皇に仕えた医者の広井朝顕（ともあき）氏が、同じく徳川家の御殿医であった父・照顕（てるあき）氏譲りの独楽作り道楽を、家業としたことから始まりました。朝顕氏は独楽の収集家でもありましたが、集めるだけでは物足りず、近所にいた独楽職人に製作技術を習い、独楽作りに精を出すようになりました。朝顕氏の息子・賢二（けんじ）郎氏は、東京の亀戸で「おもちゃ屋賢二郎」の看板をあげ、挽き物玩具（手作りの木製玩具）などを製作していました。（↘）

三猿

2004年は申年。「見ざる、言わざる、聞かざる」の三猿には、人の悪い所を見たり、言ったり、聞いたりしないで、まっすぐな心を持った人になるように…という願いが込められています。

曲独楽

漆塗りの美しさで、曲芸の技を引き立てる曲独楽。それだけに、シンプルな形態ながら完璧なバランスが要求されます。

材料となる木は幹の東西南北で質が違い、1本の内でも重い所と軽い所があるため、曲独楽を作れるまで大変苦労されたとか。

「大学の先生にも相談したけど、理論は役に立たなかった。結局、思い切って江戸時代の曲独楽を割って調べたら、自分の考えと同じことをやっていたんですよ（笑）」。

飛び出し独楽

回すと上から一つずつ独楽が飛び出して、しかもちゃんと回転します。計算ではなく、研ぎ澄まされた職人の手先から生み出される技なのです。

広井さんの創作独楽

回転させると遠心力で桃が二つに割れて、愛らしい桃太郎が現れるこの仕掛け。偶然から生まれたものだそうです。

「それこそ独楽も細々（こまごま）（笑）あるのですが」と広井さん。基本的には1個で回る独楽の遠心力を応用したり、芯（センター）をずらしたがたがたな回転の独楽を作ってその振動をほかの仕掛けに与えたりするのだそうです。

こうした独楽を創作するときは、あまり科学的に考えたりせず、慣れと失敗の繰り返しだとか。独楽のアイデアがわくと図面にするようなことはなく、すぐろくろに向かうそうです。「こうすればいいのかな」とひらめいたら夜中でも起きて作業を始めて、その結果また失敗しちゃう（笑）」。

2005年5月には、北欧フィンランドに「サンタクロースミュージアム」が完成します。内部には、1億2千億円という広井さんの作品展示室が作られるとか。これからも、広井さんの江戸独楽からは目が離せません。

※独楽の資料写真は飯能市郷土館（埼玉県）から許可を得て掲載。

聞く

宙を飛ぶ南米独楽　欧米はアート認識

◇広井さんが世界へ飛び出したきっかけは―。

25年ほど前、日米貿易摩擦についてのラジオ番組を聞いたとき、「米国がとやかく言うのは、日本に優秀な職人の歴史があり、それが最新技術の誕生につながったことを知らないからではないか」と思ったのです。

そこで、足袋屋・桶屋・扇子屋・風鈴屋など12人の職人達を連れ、西海岸のシアトル市に出かけました。「初めてアメリカ本土に上陸した日本の職人」だったそうです。江戸独楽の製作・実演を続けていると、現地の人たちも活動を認めてくれて、市が創設した名誉市民制度の第1号になりました。

それ以来、さまざまな国で巡業を続けています。独楽を作って回して子どもたちにプレゼントするという、文化交流のような形です。

◇外国の独楽にはどんなものが―。

パスアニューギニアの奥地で、どんぐりに似た木の実の独楽を見ました。実をくりぬき皮だけにして、穴を開けてもみ回すと、日本のうなり独楽みたいに「ひゅうう～」という音がするんですよ。

南米エクアドルの首都キトから大使館員の車で標高3000㍍のアンデスの峰々を巡ったとき、インディオの独楽芸人に会いました。彼の家に行ったら、集落の子どもが200人ぐらい、みんな手に独楽を持って待ち構えている（笑）。彼らの独楽は遠くまで飛ばして、的にうまく当てたら勝ち。80㌔ぐらい離れていても正確に当たるもので、400年ぐらいの歴史があるそうです。

◇どの国も独楽遊びが盛んなのですね―。

外国では今、日本の昔遊びが注目されています。「日本には、独楽や凧など昔からのいい遊びがたくさん残っている。だから、日本の子どもたちは頭がよくて器用なのだ。自分たちも、日本のそういう遊びを学びたい」と言うんですね。5～6年前に行ったブラジルのある都市では、先生方が私たちから日本の遊びを学べるようにと、大統領命令で幼稚園から大学までがまる1日休校になったほどです。

日本でも、学校や幼稚園で昔遊びのクラスができて、私も指導に行くことがあります。現代っ子と言いますが、うまく回せる子はたくさんいますよ。子どもが何人か集まって、そこに1個でも独楽があれば、結構楽しめるものなんです。順番を譲り合ったり、下手な子には教えてあげたりね。

◇独楽を通した日本と外国の違いはありますか―。

日本と外国、特に欧米とでは、おもちゃに対する基本的な考えが違う気がします。

例えば独楽に対する日本人共通の先入観は、安い・くだらない・こわれやすい…。ところが、欧米ではだれもが「大事な子どもたちに最初に与えるものがおもちゃ。独楽などの色彩や造形が心の中に蓄積されて、すばらしい芸術家が生まれるのだ」、おもちゃはアートでなければと言うんですね。

欧米ではこうした物作りの職人が尊敬されており、職人になるための教育制度も充実しています。残念ながら、多くの日本人が「勉強ができなければ職人ぐらいしかなれない」と考えているのとは対照的です。

ところで私は、シアトルに行くまで日本の職人は世界で一番器用で優秀と思っていました。まったくの間違いで反省しています（笑）。とてもかなわないような職人が世界中にいることを、日本人はぜひ知ってほしいですね。

◇独楽のように世界を回り、見識を広めてと―。

今回は海老名の広報紙だから、あまり話を大きくしてもね（笑）。まあ、「独楽職人の身なりと仕事場は汚い」というのが、ほとんど万国共通だとは分かりましたけどね。

この間都内で実演・販売をしていたら、たくさんの子どもから「おじさん、汚いね」と言われましたでも、その子たちには「ありがとう」って答えたんです。

そして、「木で作った独楽はきれいだけど、このかんな屑だって尊いんだぞ、おみやげにどうだ」と言ったら、「くれるの？」と手を出すので、小袋に入れて分けてあげました。

とてもうれしそうなその姿を見ると、子どもは職人の技と昔遊びに夢中になる、これだけは永遠に変わらないと思いますね。

触れる

作って回してびっくり！

市内の小学校などで独楽回しを教えることもあるという広井さん。師走のある日、上星小3年の子ども達が仕事場を訪問しました。

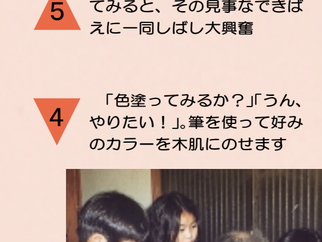
1　あいさつ代わりに大きな曲独楽を鮮やかに回し、子ども達の度肝を抜く広井さん

2　曲独楽だけではありません。その指先で、小さな独楽でもこれこのとおり

3　「独楽を作って見せようか」と、ろくろで木片を削り始めた広井さん

4　「色塗ってみるか？」「うん、やりたい！」。筆を使って好みのカラーを木肌にのせます

5　「おーっ、できた！」。回してみると、その見事なできばえに一同しばし大興奮



6　最後に「それっ」と、みんな一緒に独楽を披露。地球まで回してしまえそうな広井さんに、子ども達はとても満足した様子。「この独楽、みんなに自慢したいなあ」

こまごまコラム

◆お正月と独楽の関係

今でこそ歳時記になっていますが、正月の独楽回しは明治の少し前くらいから。当時の子どもは、盆と暮れぐらいにしかお小遣いをもらう機会がなく、また、そのとき買えるおもちゃも独楽・凧・羽子板ぐらいしかなかったからです。

◆世界中が楽しむ遊び

独楽遊びは世界中にあります。英語で「tops（トップス）」、フランス語では「toupies（ツッピース）」、ドイツ語では「Kreisel（クライゼル）」、アラビア語では「タグアーマ」…。「人類が発生して最初にできたおもちゃが独楽と凧というのは、世界の常識なんです。自然発生なんですね、人類と共に」とは、広井さんのお話。

フランスの独楽「ツッピース」（＝上）と、江戸独楽にご満悦なフランスの子どもたち（＝下）